

鹽竈浦國

播磨國石浦

んがしの極なれば、日の光もめづらかに、東方朔が十州の記に、祖州東海の中にありて、地の廣サ五百里、上に不死草瓊田の中に生すとかや、其草蘿苗に似たり、長三尺許、人已に死するときは、即これを覆へば忽蘇るとぞ、舵工にかたりく なぐさむれば、程もなく鹿島の鳥居のもとに著く、〔東遊雜記二十三〕八つ時過鹽竈浦へ御著船なり、此浦むかしにかわりて、ふね入淺く、やうく 船の通行せる事にて、所々に柱を建てしるしとせり、海面清淨ならず、入江々々沼のごとくに見ぐるし、町にあがりては、松島の町よりは大にすぐれ、三百餘軒あり、町の間に鹽筒尾命の社あり、

〔古今和歌集〔東歌〕〕陸奥歌

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

〔書言字考節用集〔二〕〕明石浦

〔倭訓栞〔前編二〕〕明石浦

播州明

〔運歩色葉集〔安〕〕明石浦
〔前編二〕あかし○中略下作る略
 日本紀に赤石をあかしとよめり、播磨の明石も、延喜式に赤石に

〔萬葉集〔三〕〕門部王在難波見漁父燭光作歌一首
雜歌
 見渡者、明石之浦爾、焼火乃保爾、曾出流妹爾戀久

〔古今和歌集〔九〕〕題しらず

ほのくと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしそ思ふ

この歌はある人のいはく、柿本人麻呂がなり、

讀人玄らず

〔今昔物語二十四〕小野篁被流隱岐國時讀和歌語第四十五

今昔小野篁ト云人有ケリ、事有テ隱岐國ニ被流ケル時○中明石ト云所ニ行テ、其夜宿テ九月許リノ事也ケレバ、明髪ニ不被寢テ詠メ居タルニ、船ノ行クガ島隱レ爲ルヲ見テ、哀レト思テ此ナ